モノトス、二駄分ハ心ヨク一兩ニ積ベシ、諸侯ノ往來ナドニ、家中ノ乘掛ヲ二駄分前後ニ積テ、中ニ兩人並座シ、談話ヲシツヽ行ルベシ、雨天ニハ荷ヲ平カニ并ベ、兩人ワカレテソノ上ニ座シ、乘掛合羽ヲ用ユベシ、川アル所ハ、淺キハソノマヽニ渡ルベシ、チト深キハ荷ヲオロシ、車力ノ者カツギワタリ、人ヲモ負ワタシ、空車ニテ通スベシ、荷ノ積卸モ、馬トチガヒ簡便ニテ、又兩人アレバ、尙サラ手間ノ入コトナシ、車力モ肩背ノ勞ヲ省キ、駕籠ヲ舁徒荷ヲカツグヨリモ勝手ナルベシ、賃錢ハ一兩ニテ一駄半ホドノ定メナラバ、旅人モ人足モトモニ利アルベク、驛場ヨリ少シヅヽノカヽリモノヲ賃錢ヨリ取テ、車ヲ作リ修ルノ料トスベシ、コレミナ多少ノ便ナラズヤ、

〔浪花襍誌〕街迺噂〔一〕万松、ソレ千長さん車が來る、あぶねい〳〵、千長、アイ〳〵承知だ、ガヤおつな車だネ、成程これは思ひつきだ、江戸の代八車より人部が入らず、そして荷を積ところが長板ときて居るから、薪などは、餘程積や正万松、さやうサ、アノ跡から撞木のやうなもので押のは面白い、慥此車をベカ車といふとか、いひやしたッけ、

こえとり車

〔水蛙眼目〕故宗匠云、民部卿入道、〇藤原爲家爲敎〇爲家子を車の尻に乘てさがより冷泉宿所へ出られけるに、爲敎卿、兄〇爲氏のあしざなる事ども被申けり、禪門、ともかくも返事はなくて、みちにこえとり車のあるを見て、

やせうしにこえ車をぞかけてける

といふ連歌をせられけるを、爲敎、よりすぢりあむじけれ共、つゐにつけざりけり、冷泉にて車よりおりらるゝとて、つゐにえつけぬな、あにのとのならばつけてましと被申けり、

車具

鞦

〔倭名類聚抄十一車具〕鞦　釋名云、車中所坐者、曰文鞦、音與茵同、車乃之度禰、用虎皮有文綵、因輿而相連著也、

〔箋注倭名類聚抄三車具〕釋車文、原書作文鞦、車中所坐者也、用虎皮有文采、因輿下相連著也、此作輿而、恐誤、按文鞦用虎皮造之、又因輿下相連著、皇國車中之鞦、用繒帛、不用虎皮、又不輿下相連著、然